

引用文献

1) 池屋重吉・加納 勇 (1950) 大豆の品種と大豆紫斑病との関係. 北陸病害虫研報 2 : 6~7. 2) 松本 巍・友安亮一 (1925) 大豆の紫斑粒に関する研究.

日植病報 1(6) : 2~15. 3) 瀬戸 昌 (1928) 大豆紫斑病の防除法. 農及園 3 : 182~185. 4) 田村 実 (1958) ダイズシホン病の発生と品種との関係. 北陸病害虫研報 6 : 20.

(1977年5月13日受領)

河北潟干拓地のノネズミ相 (第1報)

大串龍一\*・矢島孝昭\*\*・中橋典子\*

(\*金沢大学理学部・\*\*金沢大学教養部)

R. OHGUSHI, T. YAJIMA and N. NAKAHASHI : Small mammals found in the grassland of Kahoku-Gata in Ishikawa prefecture.

河北潟干拓地は、金沢市の北、約 6 km の所にある河北潟の水面 1358.6ha を干陸した 広大な干拓地である。築堤と排水による干し上げ干拓で、もとの湖底面がそのまま陸化して植生の遷移が進行している。

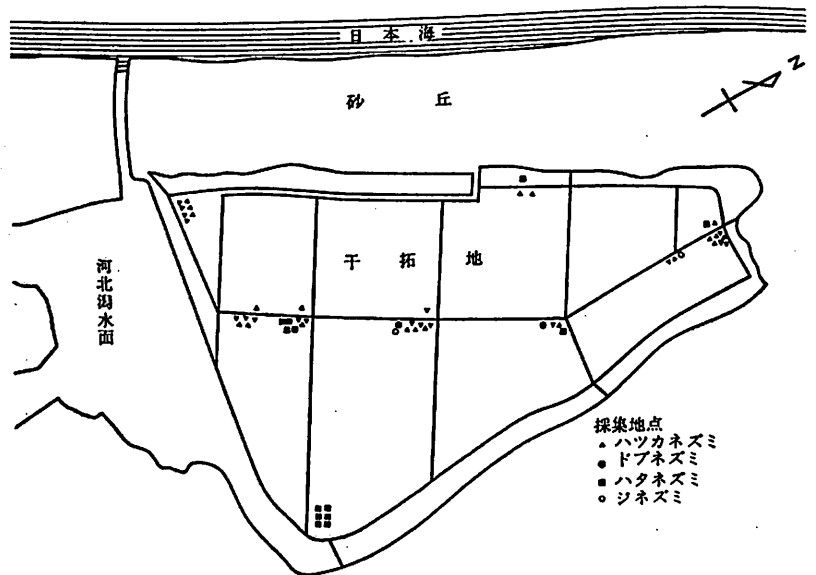
この干陸化は1970年に完成した。現在、干拓地内は広い湿地性の草原であり、排水管理設等の工事をおこなっている部分をのぞいては、ほとんど人が立入らないため、半人工的地域ではあるが野生鳥獣もかなりすみついて、ヨシを中心とする湿地草原の生態を見るためによい環境をつくっている。

われわれは、このような環境における動物相の成立と、その耕地化による変遷を明らかにする目的をもって、まず、この地域のノネズミを主とする小型哺乳類の種類構成を調査している。今回は、その第1年目の結果をまとめて報告する。

本文に入るに先立ち、この干拓地への立入りと調査を許可された北陸農政局河北潟干拓建設事務所ならびにジネズミを同定して頂いた北海道大学の阿部永助教授に厚くお礼申し上げる。

調査地の条件と調査方法

河北潟干拓地は、第1図に示すようにほぼ長三角形をした完全な平坦地で、中央に幹線排水路と道路が通り、その左右に支線排水路と道路が縦横に走って、全域をほぼ短冊形の42の区画に分けている。調査は、はじめはその南東の一角において予備調査を行なった上で定期調査に入った。定期調査は幹線排水路に沿う幹線道路上に7地点を選び、その周辺で実施した。



第1図 河北潟と各種小哺乳類の採集された地点

ノネズミ等の小哺乳類の採集には主として生捕用のシャーマントラップを使用し、はじきわなを併用した。餌としてはサツマアゲを用いた。ふつうの場合、午後2時から5時の間にトラップを設置して、翌日の午前中に回収した。1地点に20個、全体で120~140個のトラップを用いた。採集した個体は種類、性、成熟状況を調べ体の各部分を計測した。採集時に生存していた個体は、研究室へ持ち帰って飼育した。

この採集は、1976年4月15日から、11月29日までの間に6回実施した。

調査結果

1 種類相

ここで採集されたネズミその他の小哺乳類は次の4種であった。

- ハタネズミ *Microtus montebelli*
- アジアハツカネズミ *Mus molossinus*
- ドブネズミ *Rattus norvegicus*
- ジネズミ *Crocidura dsinezumi*

ここで採集された各種ごとの個体数を、採集日別にまとめて第1表に示す。

第1表 河北潟干拓地で採集された小哺乳類 (採集月日と個体数)

採集月日	ハタネズミ	ハツカネズミ	ドブネズミ	ジネズミ	計
月日					
4・15	6				6
6・8	4	1			5
7・21	1	12	1		14
9・20		4		1	5
11・4	1	7		1	9
11・29	1	15	1		17
計	13	39	2	2	56

この表で見られるように、この干拓地にはハツカネズミが最も多く、それについてハタネズミが多く採集された。

2 各種の分布と生態的観察

ここで見いだされた各種について、その採集された地点と、採集時期をもとにして、この地域内部における分布と、若干の生態的問題についてのべる。

イ) ハツカネズミ (アジアハツカネズミ)

ハツカネズミは第1図のように、ほとんどが幹線排水路あるいは西部承水路ぞいのヨシの草原の中で採集された。地上に倒れているヨシの枯れ茎の上にかかったトラップにかかったものが多い。

この採集された地点の分布状態から見て、ハツカネズミはこの干拓地の中央部までひろく分布していることがわかる。そうして降雪直前の11月末まで多く採集されて

いるところから見ても、冬季もこの原野で越冬するものではないかと思われる。ここで採集されたハツカネズミは、すべて腹面の白い野外型の個体であった。また、その体重は雄で10g前後、雌ではそれよりやや重い程度の小型のものであった。

採集された個体の性的成熟の程度を見ると、第2表のように未成熟個体は9月以降に採集されている。また、性比を見ると第3表のように7月には雌が多いのに、秋

第2表 主要種の成熟状況

採集月日	ハツカネズミ		ハタネズミ	
	成体	未成年	成体	未成年
月日				
4・15			6	
6・8	1			4
7・21	12		1	
9・20	3	1		
11・4	6	1	1	
11・29	11	4	1	

第3表 主要種の性比

採集月日	ハツカネズミ		ハタネズミ	
	♂	♀	♂	♀
月日				
4・15			5	1
6・8			幼令のため調査せず	
7・21	5	6		
9・20	2	2		
11・4	7	1		1
11・29	13	1	1	
計	27	10	6	2

幼令個体および破損のため調べられなかった個体を除く

おそくなるにつれて雄の比率が多くなっている。11月下旬にはほとんど雄だけになっている。この原因はわからない。

ロ) ハタネズミ

ハタネズミは第1図のように、調査した地域のほとんどで全域にわたって採集されており、個体数はハツカネズミより少ないが、このヨシの草原にひろく生息しているものと考えられる。春先に雪がとけてヨシの新芽が出はじめた頃には、地表をおおった前年のヨシの枯れ茎の堆積の下に、この種類の浅い坑道がたくさん見いだされる。

6月に採集されたものだけが、そろって未成熟個体の小型のものであった。

ハ) ドブネズミ

この地域のほぼ中央に近い幹線排水路のそばで、7月と11月にドブネズミが1個体ずつ採集された。いずれも実際に近いところにかかったはじきわなにかかったものである。今回の調査は、はじめハタネズミやハツカネズ

ミなどの小型のネズミを目的としていたために、ここに使用した小型のシャーマントラップではドブネズミのような大型のネズミはかからない。ドブネズミは設置数の少なかったはじきわなだけにかかったものである。この他にも、はじきわなの餌だけが取られていたり、同じくはじきわなにかかったハツカネズミの死体が食い荒らされていたりする例が、水際においたトラップで特にしばしば生じることからみて、この水路ぞいにはかなりの数のドブネズミが生息しているのではないかと思われる。

## 二) ジネズミ

ここで採集された小哺乳類としては、ネズミの類のほかに食虫目のジネズミがあった。これも第1図に示すように、幹線排水路ぞいのヨシの草むらの中でシャーマントラップにかかったものである。

## 考 察

北陸地域の、ネズミ類をはじめとする小哺乳類相については、これまでに若干の記録はあるが、正確な採集条件の記録をともなる標本をもとにした調査報告は意外に少ない。ネズミ類のように個体数が多く、多様な環境に適応できる動物群は、農耕地をはじめとする自然環境の中で重要な役割を占めているから、その正確な調査は今後ますます必要となるものと思われる。

望月によれば、富山県の平野部の農耕地にはハタネズミとアカネズミが分布している。石川県の平野部についてのまとまった調査報告はないが、アカネズミが平地から丘陵にかけて広く生息していることは、われわれを含めて何人かの研究者の最近の調査によって明らかになってきている。

この河北潟干拓地では、ハタネズミはかなりいるがアカネズミは全く採集されず、ふつうは住家性のネズミと

されているハツカネズミ(アジアハツカネズミ)とドブネズミが生息している。とくにアジアハツカネズミが多い。

ハタネズミが北陸地方の河原や低湿地に多いことは、ツツガムシ病の研究などの衛生動物学的調査からもよく知られており、同じような環境条件を示すこの干拓地でも生息していることは予想されたが、ハツカネズミが多いことはやや予想外であった。アジアハツカネズミが原野にも生息していることはすでに浜島<sup>1)</sup>によっても述べられているが、それは福岡市付近の例であり、冬季には深い雪におおわれる北陸地方の原野にもアジアハツカネズミの野外個体群が成立していることはここで明らかになった。この干拓地のヨシの草原は、地表が倒れたヨシの枯れ茎で厚くおおわれていることが多く、わらづみ等を好むハツカネズミのよいかくれがになっているのであろう。また、ドブネズミはここではすべて水辺で採集されており、水路をつたって行動しているのではないかと思われるが、採集個体数が少ないのははっきりしたことはわからない。野外のネズミ個体群としてはやや異例のこの種類構成の今後の変化については、さらに調査する予定である。

## 引用文献

- 1) 浜島房則(1962) 野棲ハツカネズミの生活史, VIII, ハツカネズミの棲息場所とその繁殖. 九大農芸誌 20 : 61~80.
- 2) 浜島房則(1969) 日本の哺乳類(8), げっ歯目. ハツカネズミ属. 哺乳類科学 18 : 11~23.
- 3) 望月正巳(1962) 耕地野鼠害に関する生態学的研究. 富山農試特別報告 4 : 1~135.

(1977年4月5日受領)

## 雪中カンランの鼠害について

望月正巳(富山県立技術短期大学)

M. MOCHIZUKI : Damage of winter cabbage caused by rodents.

積雪地域におけるマイナークロップである雪中カンラン、チャーリップなどは、市場性が高く栽培地区では主

要な農作物となっている。

これら農作物の冬期鼠害は、ほかの地域に比べ甚だし